

文章教育の前に必要なこと：事実表明と評価表明・態度表明の区別

著作者：luuffie（放課後大学プロジェクト 提案者）

1

タイトルの説明からおこないます。事実表明と評価表明・態度表明の区別が必要だと私が言いたいのは、（もちろん）文章教育をする側の方です。される生徒や学生の方ではありません。「思考法」に関する本だと概して何かしら得るものがあるのに対し、「文章の書き方」に関する本からは得るものが概しておそろしく少ないのですが、その象徴とも言えるのが、「文章の書き方」本の著作者が概して「事実表明と評価表明の区別」ができていない、という点です。

「Aは論理的である」とだけ述べ、その「論理的」についての説明が特にない場合、読者は「Aがどうなっているか」についての情報を何も得られません。得られるのは「著者がAを称賛していた」ということだけです。「論理的→称賛」というように、ある語が、事実についての情報を述べているような形をとっていながら、その使用者の価値観や態度のほうこそをかなりの確率で推察させてしまうようなそういう語を、伊勢田哲治は「二次的評価語」と呼んでいます（『哲学思考トレーニング』）。これ自体は重要な指摘であり、類似の指摘をしている著者もあまり見当たりません。しかし「二次的」であるかどうか、とか、「語」であるかどうかとかは比較的どうでもいいので、以降はあまりその点を気にしないことにします。

「Aは論理的である」とだけ述べても「A」についての情報がほとんどゼロであるのは、「論理的→称賛」というふうに決めることができるから**だけではありません**。「Aはおいしい」とか「Aはかわいい」なら、これらがいずれも「称賛」の文であることはほとんど確実ですが、にもかかわらず、「A」についての情報がゼロだとまでは言えない気がします。それは「**何についての称賛か**」がある程度は**はっきりしている**からです。とは言え、「おいしい」が味覚という点での称賛であるのがはっきりしているのに対し、「かわいい」はそれなりに多様です。その多様性の根本にあるのは、「Aはかわいい」という主張の根拠が「A」の側には**はっきりある**という用法と、「Aに対する主張者の関係や態度」の側にある用法との**混在**です。主張の根拠が「A」の側にある場合は、それほど多様でも多義的でもなく、「Aはかわいい」と言ったときにそれが「容貌」についての主張を含まないことはありえないほどです。それに対して、「Aはかわいい」の根拠が「Aに対する主張者の関係や態度」の側にある場合は、ものすごく多様・多義的になります。多義的になってしまうのは、「Aの属性」に照準して根拠を探すからです。この「かわいい」と同様の混在をしているものとしては、たとえば「特別な」があります（土屋賢二『あたらしい哲学入門 人間はなぜ八本足か』）。「かわいい」は、属性に照準した用法の場合は「何についての称賛なのか」がある程度は**はっきりする**のに対し、「関係・態度」に照準した用法の場合は、「何に付いての称賛なのか」

が無条件にはわからないことになります。

「論理的」もまた、それだけ使われた場合、「何についての称賛」なのかがひどくわかりづらい語です。ただし「論理的」の場合がわかりづらいのは、そもそもこの語が主張全体のなかでの「基幹的」なものとして使われないものだからです。その主張全体の中で、大した位置を占めておらず、したがっていちいちあまり詳しく解説もされません。だからこの語が使われているとき、読者が分かることは「称賛している」ということだけです。「Aが論理的である」と言われて、「Aがどうなっているか」の情報はほとんど得られないのです。何についての称賛なのかもはっきりしないのです。もう一つ言えることは、「論理的」という語が使われがちな文脈というのが、「上から目線」の「一方通行で言いつばなし」というものが多いからでもあります。エライ人がエライくない人の仕事を評価するときを使う語なのです。教師が生徒を、上司が部下を、評価するときにもつばら用いられ、その反対はほとんど許容されていないような、そういう語なのです。通常と反対の場面を想像してみるとよくわかります。生徒が教師を「論理的な授業ですねえ」と評価するとき、ほとんど「反抗」に近いような印象を持つはずです（面と向かって言うと「反抗」に近いものになりうるけど、アンケートで「〇〇先生の授業は論理的です」と書くと「称賛」になります。面白いですね）。そのような使われ方の総体が、「論理的→称賛」「論理的→何についての称賛なのか分りにくい」「論理的→対象についての情報がほとんど得られない」という状態を作り出しています。

事実表明と価値表明・態度表明の区別が「文章の書き方」本の著者にとりわけ必要だと思うのは、こういった著者がわりと安易に、「対象についての情報がほとんど得られず、主張者の態度ばかりがわかる語」を基幹的なものとして使いたがるからです。以下、その例を二、三示します。

2

「考える」という語は、優れて「主張者の態度」がよくわかる語であり、肯定的な評価をするときに使うことが通常です。厳密に言うと、「考え」「思考」という名詞の使用がそれに該当します。つまり「考える＝考えを産出すること」というふうに使われている場合に、そうなります。「考え」「思考」というのが、ある程度以上肯定的な評価をするときにしか使わない語だからです。

したがって、「考える」という動詞形は使っても、「考え」「思考」とはあまり言われたいようなタイプの用法はこの例外となります。たとえば「空想」「想像」「計画」「予期」「想起」などのときの「考える」は、肯定的評価であるかないか、とあまり関係なく使いうるようになります。

肯定的評価と一体化したような「考え」「思考」は、べつに「文章の書き方」本でなくても関係しうるし、「思考法」の本にだって当然出てくるでしょう。しかし私はここでは特に「文章の書き方」本を想定したような批判的議論をしておきたいと思います。理由のまず

一つは、文章と思考との関係の二義性です。一方では「書くためにはまず考えなくてはならない」と主張され、書くためのツールとしての「思考法」が提案されることがあります。他方で、「書いたものそれ自体が考え・思考である」という言い方もできます。「書く」として「考える」としては、二種類の関係を担わされることになり、そのため「文章の書き方」本の中で「思考」「考える」などが基幹的な概念になりがちです（厳密には「書くこと」によって考える」もあるので三種類の関係ですが、これは当面どうでもいいです）。

もう一つの理由は、にもかかわらず、「文章の書き方」本の著者の多くは「思考法」そのものの専門家でなかったり、そういう専門家の書いたものを勉強することに向いていない人であることも少なくない、ということです。もともと「文章の書き方」本の著者のしてきた勉強というのは「美しい文」「格調高い文」を書くことのほうであり、「考えを発表する文」や「企画書」のようなものを作る勉強ではないことが、まあ多いわけです。適性の異なる事柄にむりやり取り組んでいるため、「思考法」の専門家が「思考」について言及するのに比較して、だいぶ無理がある場合もあります。

さて、「考える」という動詞自体は、比較的中立的に使うこともまあ可能です。「考える」という動詞は、「所与以外・以上の何かを生み出すこと」とでもいうような使用規則を必要条件としていますが、「では何が所与であり、何が所与以外であり、何が生み出すことになるのか」に関しては幅があります。ところがここで「考え」「思考」という名詞形を関与させると、「考えるとは考えを生み出すこと」となり、ここで価値評価が混在してきます。もともと幅がある言い方だった「考える」が、「考えと呼ぶにふさわしいものを生み出すことが考えることだ」というふうに評価的な方向に変形されます。「Aという考え」という言い方がされていても、そこでわかるのは「Aについての情報」であるというよりは「主張者がAを称賛していることだけ」である、ということにだんだん近づいていくのです。

「何が考えと呼ぶにふさわしいのか」はそれでも価値評価込みにした言い方で、ある程度以上明確化・定式化も可能でしょう。「たんなる事実報告ではなく、それ以上の何かを生み出すこと」「たんなる観察ではなく、それ以上の何かを生み出すこと」「たんなる機械的適用ではなく、それ以上の何かを生み出すこと」「たんなる条件反射や紋切型ではなく、それ以上の何かを生み出すこと」「たんなる感情的反応ではなく、それ以上の何かを生み出すこと」…とかまあこんな感じでしょうか。たとえば「文章の要約」が「思考」にあたるかどうかは、「要約」が「たんなる観察」や「たんなる機械的操作」によって可能かどうか、その判断によって決まってくるでしょう。だから戯画的に言えば「難しい文の要約だと思考だが、易しい文の要約は思考ではない」というふうに循環的に規定されているということになります。要約以外の課題についても同様です。

「思考」や「考えること」と「理解」との関係ははっきりしないのも、これらの定式化から見当がつきます。「理解」もまた肯定的にもっぱら使われる語だと言ってよいでしょう。したがって「たんなる理解」という言い方がしにくいのです。どうしてもというときは「たんなる受動的な理解ではなく、それ以上の能動的な何か」みたいにして「思考」「考えること」

を位置づけるしかありません。

「思考」や「考え」はすぐれて肯定的価値評価に特化して用いられる概念です。主張者が「すぐれている」とか「すばらしい」と思えば使うことができ、そう思わなければ、当人が「私は考えました」と言っても「そんなことでは考えたとは言えない」として却下することもできてしまう、そういう概念でした。「Aという考え」という言い方では、「Aがどうなっているか」についての情報を伝えることがあまりできず、「Aを称賛している」という態度ばかりが伝わるような、そういう概念でした。そのことを看過している「文章の書き方」本は、まあそういうものがあればですが、あまり役に立たないのではないかと思います。もっともそれは「思考法」の本にだって言えることではあります。

3

「感想」という概念は、半分くらいの用法は「否定的評価」に特化して用いられます。「Aという感想」というふうに言われたときには、「Aについての情報」はほとんど手に入りませんが「主張者がAを否定的に評価している」ということは伝わります。ただ、ほとんど価値評価を含まない用法や、肯定的評価をする用法も混在しています。「感想」というのはあまり多義的であるとは見なされていない語ですが、どのような価値評価をなしうるか、に関しては、あいまいな語です。

おおまかに言えば、対象が「感動するのが好ましいもの」であるか、そうでないか、によって違ってくると言えます。「感動するのが好ましいもの」(芸術作品・人道的事象など)に対しては「感想」は肯定的評価であることが多く、「正確さが好ましいもの」「批判的であることが好ましいもの」(学問・報道など)に対しては「感想」は否定的評価であることが多い、くらいのことは大まかな傾向としてなら言えるでしょうか。

「感想」という語は、前者の場合は「無感想(無感動・無関心)」と対比され、後者の場合は「事実」「正確さ」「批評性」などと対比されます。「感想」がそれなりに多義的というかやや曖昧なのは、「対概念」がそれなりに多様だからです。しかし、これらのいずれの場合であっても「知覚・感覚」との関係がはっきりしません。「感想」と「知覚・感覚」との曖昧な関係が、曖昧な議論、曖昧な規定を招き寄せます。

二種類の関係を区別するのが良いと思います。一つは「甘い」と「おいしい」の関係、もう一つは「おいしい」と「好ましい(良い・素晴らしい)」の関係です。「Aは甘い」「Aはおいしい」「Aは好ましい」のどれもが「感想」と言われうるわけですが、その内実は大きく異なっています。「甘い」はおそらく自然科学的に測定できます。「Aは甘い」というのが仮に「感想」だとしても「たんなる感想に過ぎない」とまでは言いにくいと思います。Aを化学分析などすれば甘み成分などを抽出し、量を測定することもでき、「Aは甘い」に対応するような「科学的事実」を提出することも可能だからです。「Aはおいしい」はそれに比べるとずっと「感想」度が高いとは言えます。ですが、この場合であっても、もちろん、その根拠を「A」の側に一定程度求めることができ、一定の事実記述を根拠として提出する

ことも可能です。「感想」ではあっても「事実」に根拠を求めることのできる「感想」です。また、それとは別次元の話になりますが、「Aはおいしい、とする人が100人にアンケートをとったところ86人でした」という「調査結果」を得ることも可能です。この場合「感想」ではあっても「より多くの人の」感想です。しばしば「それは感想に過ぎない」というとき、それは「感想だからいけない」のではなく「少数派だからいけない」ということだったりもするわけです。それに比べて「Aは好ましい」となると、何についての肯定的評価なのかが単にわかりにくいだけ、ということになります。もし何についての肯定的評価なのかを明示すれば、それはさきほどの「おいしい」と同じようなレベルでの「感想」になり、以下同じです。なお、「Aは好ましい」と「Aが好き」との違いというのもありえますが、今はあまり関係ないです。

「感想」というのは、してみると「事実」とほんとうに対立的に用いることができるのか、少々怪しくなってきます。「知覚的事実」というのもあるわけですし、それと「私はこのように評価する」という評価の表明とは違います。「文章の書き方」本で「感想」という概念を基幹的なものと使おうとしても、おそらくうまくいかないことでしょう。とりわけ「事実／感想」という二分法ではダメだろうと思いますが、それは「感想」がわりとどうとでも使いうるものであり、その区別が必要だからにほかなりません。

(初出：2013年2月5日)